平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな 学校名	かながわけんりつおっぱまこうとうがっこう 神奈川県立追浜高等学校

校 長 名：小西　憲一

所 在 地：神奈川県横須賀市夏島町 13 番地

電話番号： 046-865-4174

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	地理歴史（日本史Ｂ）

≪研究主題≫

生徒の学習意欲や思考力・判断力・表現力等を高めるためのプレゼンテーションソフトを活用した教材の工夫・開発及び生徒に主体的に学習に取り組ませるための授業形態と学習方法の研究

【研究の要点】

学習意欲を高め，主体的に授業に取り組ませるには，生徒の興味・関心を高める「魅力ある授業」を行うことである。それには「不断の授業改革」に取り組み，魅力ある教材の工夫・開発が必要である。こうした視点で，プレゼンテーションソフトを活用して作成した教材を使った授業と，生徒にプレゼンテーションさせる授業を軸に取り組んできた。プレゼンテーション教材を通じて，生徒の学習への興味と授業への集中を高め，また学習の視点や方法の幅を広げることができた。

生徒にプレゼンテーションさせる取組を通じて，伝達したい内容をどうまとめ，どう表現し，どういう伝達方法をとったらいいかなどを考えさせることができた。生徒は，それぞれの個性や得意分野を生かした多様なプレゼンテーションを展開した。

また，単元ごとにその内容を総括させる論述を通じて，思考力・表現力の向上を図るとともに，知識の確実な定着を図ることができた。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

追浜高校は，三浦半島北部の住宅地に位置する。大部分の生徒は大学進学を希望し，勉学はもとより部活動や学校行事にも熱心に取り組んでいる。生徒は，礼儀正しく素直であるが，主体性に課題があるように思われる。

本校は平成 19 年度から 21 年度までの 3 年間，神奈川県教育委員会から「PISA 型読解力向上実践研究」の指定を受け，研究に取り組んだ。平成 22 年度からは，神奈川県教育委員会から「学力向上進学重点」及び「言語活動充実」の研究指定校に指定され，研究を推進することとなった。

２　学校の概要（平成 22 年 4 月 5 日現在）

課程	学科	１年		２年		３年		４年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	6	239	6	238	6	239			18	716
定時制	普通科	4	111	3	64	3	57	3	64	13	296
合計		10	350	9	302	9	296	3	64	31	1012

教員数 66 名　内全日制教員 46 名（7 名）

地理歴史科の科目の開設状況

学年	必修科目	必修選択科目	自由選択科目
1 年	地理 A （2 単位）		
2 年	世界史 A 日本史 A （各 2 単位）		
3 年		世界史 B 日本史 B 地理 B （各 4 単位）	テーマ世界史 テーマ日本史 テーマ地理 （各 3 単位）

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

生徒の学習意欲や思考力・判断力・表現力等を高めるためのプレゼンテーションソフトを活用した教材の工夫・開発及び生徒に主体的に学習に取り組ませるための授業形態と学習方法の研究

(2) 研究主題設定の理由

本校は神奈川県の「PISA 型読解力向上実践研究」の指定を受け研究を推進した。各教科は，生徒の関心・意欲を高め，主体的に授業に取り組む工夫を行い，地理歴史科日本史担当も生徒の興味・関心を高める「魅力ある授業」実現のためプレゼンテーション（以下本文中「プレゼン」と言う）ソフトを活用した教材を開発した。さらに，生徒がプレゼンを実践する取組もこの研究の主題とした。

また，平成 22 年度から，神奈川県の「学力向上進学重点」及び「言語活動充実」研究指定校に指定され，研究を推進した。プレゼンソフトを活用した授業や生徒によるプレゼンで，生徒が興味・関心をもって学習し，学力向上を図ることができるか，また，「言語活動の充実」を図ることができるかについても研究課題とした。

(3) 取組体制

校長を座長として，評価研修グループ及び地理歴史科教員をメンバーとした校内研究推進委員会を設置し,研究推進の協議と教材の開発を行った。担当教員間の教材の共有，生徒の学習状況の情報交換を日常的に行った。また，教科内での授業公開を日常的に実施し，校内研修を担当している評価研修グループ主催の公開授業においても研究公開授業を実施した。

神奈川県教育委員会と連携して取組を進めた。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	①通年でのプレゼン教材による授業展開 ②各単元毎の生徒によるプレゼン ③生徒のプレゼン後の生徒相互の評価 ④探究成果を論述させる課題への取組 ⑤家庭学習に対する指導
平成22年度	①通年でのプレゼン教材による授業展開 　プレゼン教材の工夫・改善 ②各単元毎の生徒によるプレゼン ③生徒のプレゼン後の生徒相互の評価 ④単元毎の内容を総括論述させる取組 ⑤家庭学習に対する指導

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

「魅力ある授業」実現のためのプレゼン教材による授業展開には，いくつもの課題があった。

①教材内容に応じてどうスライドを編集するか？
②通年のプレゼン教材をどう工夫し改善するか？
③生徒のプレゼンをどうサポートするか？
④プレゼン教材による授業と生徒の総括論述とをどう連携させるか？
⑤ほとんどの生徒が大学受験を控える状況で，上記の授業展開は有効か？

これらの課題は当初より想定されたものであったが，解決の目処は立っていなかった。

プレゼン教材による授業展開は，本研究に取り組む２年前よりすでに実施していたもので，本研究への取組は，先に述べた本校の「PISA 型読解力向上の取組」の実践指定及び「学力向上進学重点」，「言語活動充実」の研究指定に取り組む過程と同時展開で行った。

(2) 具体的な取組

①効果的なプレゼン教材の作成

新学習指導要領の解説には，「遺跡・遺物や複製品からその用途を推理させたり，絵画資料に描かれた内容から現在との違いを発見させたりして

…」とあるが，縄文時代人と弥生時代人の顔を骨から復元した写真やイラストから現代の私たちの中に類似の顔つきを連想させ，一層興味を高めることができた。図 1・2 のスライドには，「私は縄文時代人に似ている」「私は弥生時代人」などと大変興味を示した。縄文時代の習俗などの分野は，解説を加えないと理解が難しいので，図 3 のスライドのように整理し，図示することで理解を深めた。

原始・古代については，発掘された資料など視覚的に理解を深めることができるものも多いので，情報の映像化や図解化から，イメージでの把握を可能にした。速読法で「音の読書から光の読書へ」と言っているが，つまり広い平面を画像としてとらえることで，情景を映像として記憶していることが多くなるということにも通じていると思う。

図 1

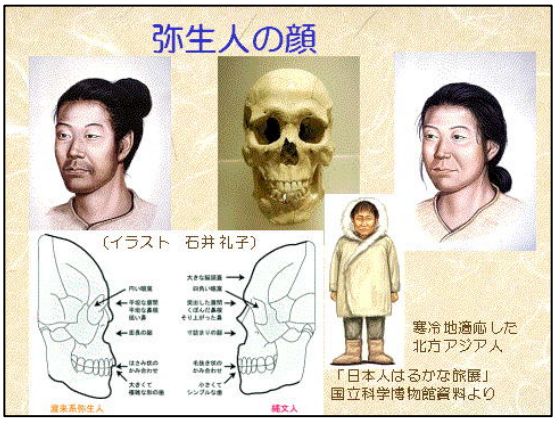

図 2

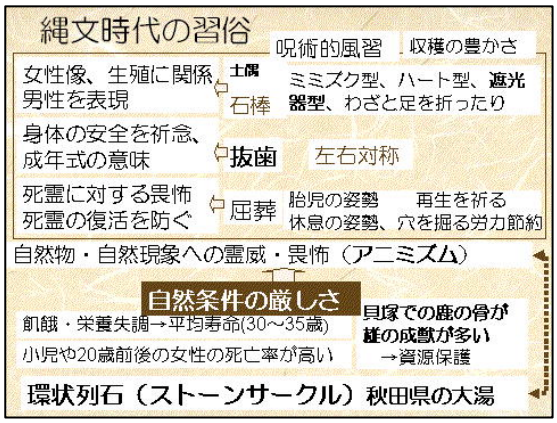

図 3

学習指導要領解説の２(1)「原始・古代の日本と東アジア」では，「写真やビデオ等の視聴覚教材や実物教材の活用，博物館等の利用，遺跡や遺物の見学などを取り入れることは，生徒の関心や意欲を高めるとともに学習を深化させる上で効果的である」とある。今までは副教材の資料集の図版などを多用してきたが，「説明→板書→ノート」という展開過程の中で資料集を見せる授業では「映像記憶」として学習する効果は得られない。「映像記憶」は単に写真等の視聴覚教材に限られるものではない。図 3 のような学習内容を図式で表したスライドを読み解くことも，「映像記憶」としての学習やその理解に役立つと思う。

説明の内容を逐次板書するのと、スライドで学習内容全体を画像で示すのとでは，学習手順が全くといってよいほど異なる。後者の場合，生徒は次々に展開する画像を速読法的な「映像記憶」で読み取り，理解する。その画像を使って次に教員が説明する。生徒は「映像記憶」として学習したスライドを教員の説明で論理的に理解するという手順になる。

学習指導要領の解説に「それぞれの時代の社会や文化の特色について，東アジア世界の動向や東アジア世界からもたらされた文物・諸制度が，我が国の国家や文化の形成に大きな影響を及ぼした…」とあるが，図 4 で天平文化の中心をなす仏教が当時どういう役割を担っていたかを見極め，同時に図 5 で天平の仏教芸術の建築，仏像，絵画，工芸等の遺産を見ていった。

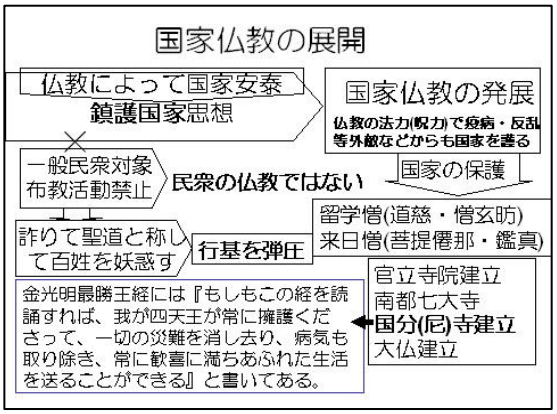

図 4

図 5

図 6

図 7

同じ写真でも，仏像を大画面で表示したスライドは資料集で見るのと迫力が全然違い，直感力を養うのに有効である。図 7 は，鎌倉時代を代表する空也上人像で，ほとんどの教科書や資料集に登場する有名な仏像である。従来の授業では，この仏像を扱ってもそれほど大きな反響はなかった。ところがプレゼン教材で画像を使用し，大画面画像でこの仏像を扱った時，生徒たちは予期しないほど興味を示した。

中世について，学習指導要領解説には，「それぞれの時期において武士，公家，寺社，民衆などそれぞれがどのような政治的な役割を果たし，また社会や文化を形成したか，中世という時代に顕著な多様性に注目させる」とある。図 8・9 の絵巻物の異類異形等を扱い，政治の動きや文化だけではなく，民衆の動きにも目を向け，中世という時代を考えさせることができた。また，図 10・11 から室町時代の下肥としての人糞の利用を導き出す取組も生徒が大いに興味を示したものである。

図 8

図 9

図 10

図 11

近世では，「歴史的事象について異なる解釈が成立したり新しい解釈が生まれたりし，それに伴って複数の歴史叙述が生まれもする。…例えば，田沼意次の政治については，『封建制の弛緩を進めた金権政治』という解釈もあるし『新しい経済秩序の樹立を企図した革新政治』という解釈もある」という学習指導要領解説の内容を踏まえて，図 12・13・14 のようなスライドを用意した。

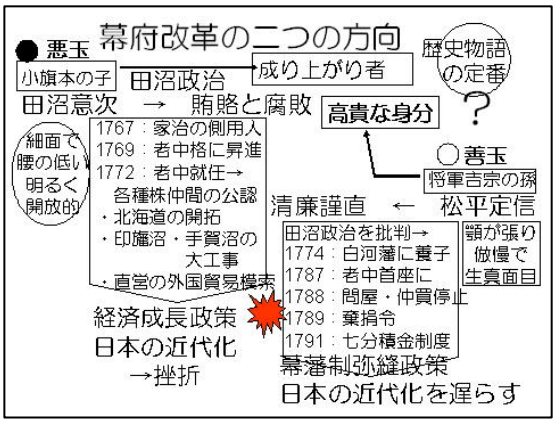

図 12

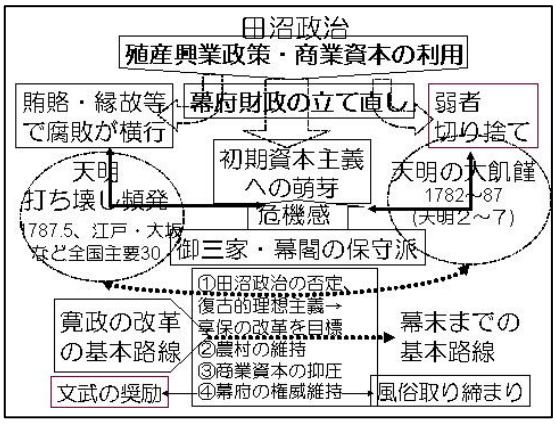

図 13

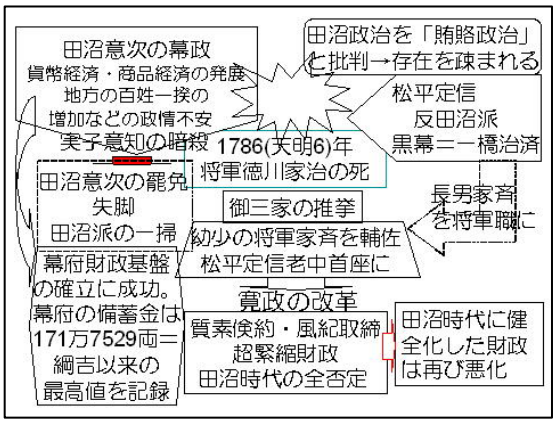

図 14

田沼意次と松平定信は，歴史小説やドラマ等で取り上げられることも多い。その中では，田沼＝悪玉，定信＝善玉として取り上げられることが多く，日本史の授業でも，同様のとらえ方をしている場合が多い。こうした田沼政治に対して「新しい経済秩序の樹立を企図した革新政治」という解釈もあるという観点から，スライドを作成して授業を行った。

スライドの内容を板書して説明した場合は数倍の時間を要し，印刷物を配布する場合は年間の印刷枚数が一人千枚以上に及んでしまう。生徒もアンケートで「黒板に書いて説明するより時間をとらず，限られた時間を無駄にしないという点でも良いと思う」と指摘している。

図 12・13・14 のように歴史的事象を構造的にとらえることで，多面的に評価する俯瞰的な視点によって歴史構造を判断することが可能になる。俯瞰的視点は，「問いの体系」の糸口になる。歴史的事象の構造を俯瞰した場合，歴史はいくつかの

選択を準備していることが分かる。しかし，歴史の授業では「答え」が決まっていたかのごとく，歴史的事象を安易に必然としてとらえてしまう傾向がある。「問いの体系」という考え方を，図 12 の「幕府改革の二つの方向」のスライドに当てはめてみた場合，江戸時代に内在した矛盾や体制の綻びが田沼政治を引き出し，幕府権力の保守派との対立を生み，松平定信の寛政の改革に向かわせるが，その歴史の構造の解明には，鋭い視点，鋭い切り込み方，鋭い着想力に基づく「よい問い」を要請している。

②生徒によるプレゼンテーション

「PISA 型読解力向上の取組」において，生徒が研究課題を発表する取組を行ってきた。クラスを５人程度のグループに分け，単元ごとに，生徒自身が興味をもった研究課題に取り組み，テーマを設定し，グループで協力して情報収集・考察・協議・プレゼンをするものである。プレゼン後，説明者側・聞き手側それぞれの意見・感想を発表することで，より考察を深め，次回のより良いプレゼンにつなげられるようにした。

生徒の発表については，必ずしもパソコンなどの情報機器を使用するように指示したわけではないが，ほとんどの班が情報機器を利用してプレゼンを行った。また，寸劇を行った班，自作イラストを使用した班，教師側が示した課題に挑戦した班など様々な取組が見られた。

図 15　生徒作成のスライド（自作イラスト）

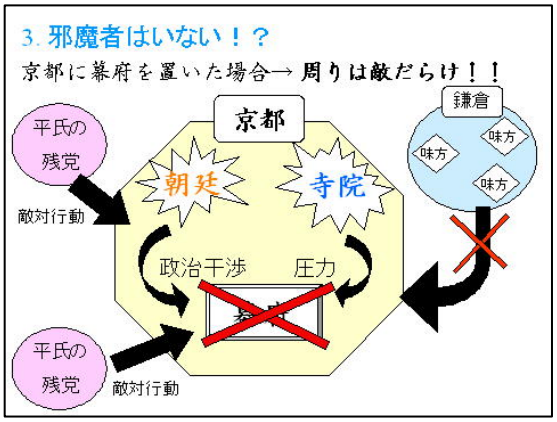

図 16　生徒作成のスライド

写真　生徒によるプレゼンの様子

③生徒による各単元の内容の総括論述

単元ごとにその内容を総括させる論述を課すことで，思考力・表現力の向上を図るとともに，知識の確実な定着を図るように努めた。図や表を使用せず，自分の言葉で単元の内容をまとめるように指示した。授業内容を忠実に記述する生徒，苦手な分野をあえて選び，自分で調べ直し，再度理解しながら記述する生徒等様々な姿が見られた。

④家庭学習に対する指導

授業では扱いきれない新しい発見や学説等について，新聞記事等の読み物的教材として配付した。例えば，「空海と最澄の仲違いと高野山・比叡山の公式訪問」「遣唐使に関して中国での円仁の名の発見」「感染症で探る日本人ルーツ」等の新聞記事が，生徒の興味を集めていた。また，日本史Ｂの選択者には大学受験で日本史を選択するなど発展的な学習を希望する生徒も多いため，発展的な学習用の教材を配付した。

(3) 考察及び成果と課題

①プレゼン教材を活用した成果

生徒たちは，今までプレゼン教材を活用した授業に触れる機会がほとんどなかったため，4 月に授業を受けた当初は戸惑いが大きかった。平成 22 年 4 月に実施したアンケートでは，半数の生徒がプレゼン教材を活用した授業に興味を示したが，15%近くの生徒は興味がないと答えていた。

しかし，学年末に実施したアンケート（調査対象日本史Ｂ受講者 71 名，調査時期 11 月中旬，調査方法自由記述）は図 17 のような結果を示し，下のような回答が多数みられた。

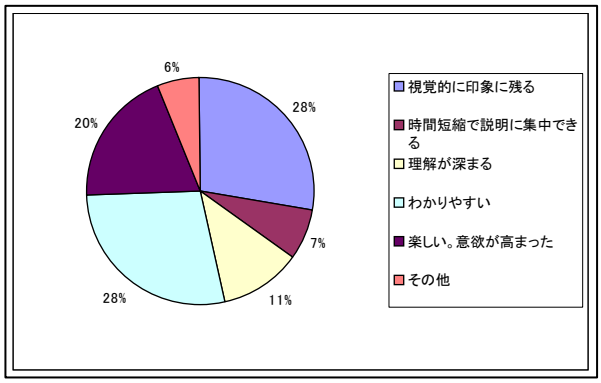

図 17

「この形式の授業は吸収できる情報量が多く，多い情報も，画像等と結び付けて覚えることで，より印象に残る」「手元の資料集で小さな写真で見るよりも，大きな画面は見やすいし，印象に残る。歴史の流れが非常にわかりやすかった」「新しい学説に触れることで，今まで知っていたことも，ちがう側面から見ることができ興味深かった」「説明が十分に聞ける。また，絵の細かいところまでよくわかる」「この授業を通して，改めて歴史の面白さと難しさを感じられた。『見る角度によって違って見える歴史』も本当に面白かった」「この授業を受けて，自分の考えが一方からしか見ていなかったことに気付き，歴史のみならず，様々なものごとを，多方面から見ることの大事さを知った」。

多くの生徒がプレゼン教材を活用した授業に賛意を表し，教師側が意図したことを理解していることがわかる。

②生徒たちがプレゼンテーションする取組の成果

平成 22 年 4 月に実施したアンケートでは，約 25%の生徒が積極的にやってみたいと答える一方で，「3 年生だから受験勉強で時間がない」「面倒くさい」等の回答も多く，約 25%の生徒がやりたくないと答えていた。

しかし，学年末に実施したアンケートでは，図 18 のような結果を示し，下のような回答が多数みられた。

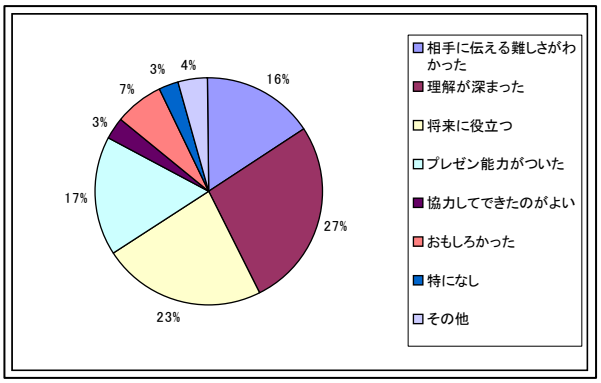

図 18

「自分の言いたいことを効果的に相手に伝えるために，多くの情報の中から必要な情報をどう選ぶかが大切であり，相手にしっかり伝えるためには自分がしっかり理解していないと相手に伝わらない」「グループで協力してできたのが良かった」「発表者側がきちんと理解しての発表であれば，聞き手も積極的に聞いてくれる」「説明者の意図を理解しようという態度で聞けた」「他の班に負けないように表現方法を工夫した」「自分で調べ歴史により興味をもつようになり，そのおかげで受験勉強もがんばれた」。

多くの生徒が発表型授業の意義を認め，主体的に学習する楽しさを学んだことがわかる。

③生徒に総括論述を課す取組に対する成果

平成 22 年度に初めて実施した取組であり，文章を書くことを苦手とする生徒も多いため，平成 22 年 4 月に実施したアンケートでは，半数以上の生徒が「大変そう」「面倒くさい」と答えた。しかし，学年末実施のアンケートでは，図 19 のような結果を示し，下のような回答が多数みられた。

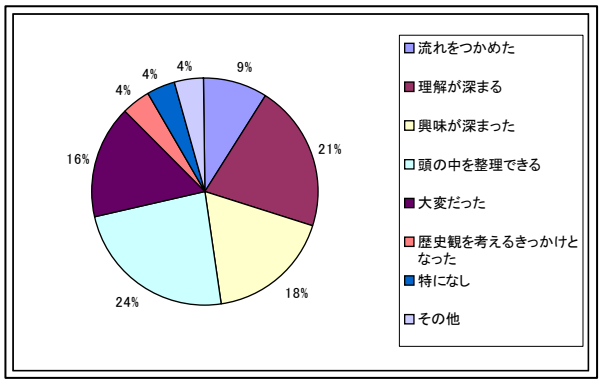

図 19

「学んだことを文章にして論述することにより，断片的に理解していた情報が頭の中で整理され，理解が深まった」「流れをつかむことができ，大変だったが達成感があった」「図や表を使わないレポートがこんなに大変だとは思わなかった」「自分自身がその事柄をどう思っているのか整理することができた」「自分の意見を書くのは，今後にとっても良いことだと思う」「自分の歴史観のようなものを考えるきっかけとなった」。

多くの生徒が，取組の趣旨を理解したと考えられる。

④家庭学習に対する成果

図 20 のように，「歴史に対する理解度・興味が変わってくる」「生活の中で進んで新聞記事を探すことはないので，興味深かった」「授業中に理解したことを更に深めることができた」「昔のことが今につながっていることを実感できた」「歴史は変わっていくものだということが実感できた」等の感想を得た。

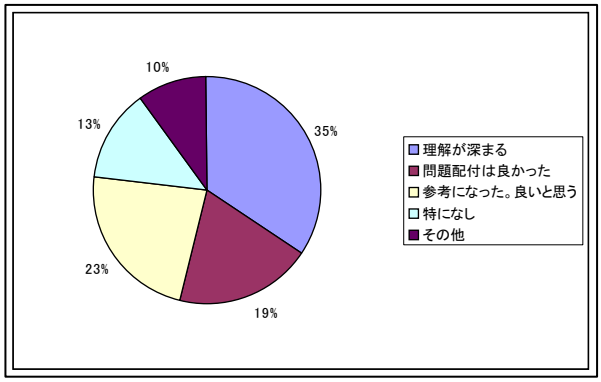

図 20

３　研究の成果と課題

平成 22 年 2 月 3 日に行われた平成 21 年度国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会全体会の文部科学省初等中等教育局視学官太田光春氏の講演の中で，「強制的な学びは，短期記憶でしかない。主体的な学びには内からのエネルギーが必要である。言語活動の充実は，多角的視点からとらえることである。今までの教育は外から内に入れていた。これからの教育は内なるものを外に出していくことである」という話があった。

学習に対するモチベーションを高め，生徒に主体的に学習に取り組ませるために，大画面画像から体験的学習が行え，情報の映像化・図解化から論理的思考力を育成できるようなプレゼン教材を開発・活用し，生徒がプレゼンをする授業を行ってきた。これらは生徒が意欲的に学習するための内なるエネルギーを育てるための授業改革だったと考えている。

生徒のアンケートに見られるように，ほとんどの生徒がこの取組を肯定的にとらえ，評価している。また，生徒に学習する意図や方法をきちんと説明し，一緒に考え，各生徒の考えを尊重し，プレゼンさせることにより，予想以上の学習効果が見られた。このことが今回の研究の最大の成果であったと考える。

教育の手法は，確実に変化している。今回の研究も一つの新たな取組だと考えるが，全校をあげて学習方法を工夫し，今後も組織的で恒常的な授業改革に取り組み，生徒のニーズに応えられる授業を行うことが重要だと考えている。

【参考文献】

木村捨雄「変化する日本の教育への期待：発見・発明を基盤にする独創的創造性の教育と統計教育」（日本科学教育学会第 30 回年会，科学教育論文集，2007. 7）

永田豊志『頭がよくなる「図解思考」の技術』（2009，中経出版）

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名（ふりがな：とうきょうがくげいだいがくふぞくこうとうがっこう）	東京学芸大学附属高等学校

校　長　名：新田　英雄

所　在　地：東京都世田谷区下馬4-1-5

電話番号：03-3421-5151

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科	地理歴史（地理Ａ・日本史Ａ）

≪研究主題≫

フィールドワークを通じた２科目連携学習による，「地域への主体的思考」を育成するための指導の改善

【研究の要点】

本研究は，新しい高等学校学習指導要領地理歴史科において重視されている諸資料の活用や野外実習，科目間の連携を実践し，「地域への主体的思考」，すなわち，身近な地域について自ら主題や課題を発見し，様々な資料に基づいて地理的・歴史的に考察する力を育てる指導方法の開発を目指したものである。

そのための具体的な取組として，本校で長年にわたって1年次の1学期に実施してきた地理実習（東京を題材としたフィールドワーク）を核とし，その体験や観察事項を基にした地理A・日本史Aの担当者によるチーム・ティーチングによる授業や，各科目の授業を実践・公開した。

その結果，以下のような成果をあげることができた。

1）地理実習の実施によって，野外実習と事前，事後指導のモデルケースを確立することができた。また，その指導によって，身近な地域に対する生徒の関心を喚起し，地理的技能を習得させる機会として野外実習が有意義であることが確認できた。

2）地理A・日本史Aの科目連携授業（チーム・ティーチング）を実施し，現在の東京が抱える諸課題解決のためには，地理的条件や歴史的背景を考慮した多面的・多角的な考察が必要なことを生徒に実感させることができた。

3）地理実習の体験や観察を踏まえた地理A・地理Bの授業を実施することで，教室内での学習を中心とする授業の様々な単元でも地理実習の有効性が確認できた。

しかし，生徒が「自ら主題や課題を発見」する力を育てること，地理実習を通じて生徒の認識がいかに深まったかを評価するという点については，十分な検証ができなかった。また，必履修となる世界史Aや選択履修となる地理B・日本史B・世界史Bとの科目間連携の在り方についても今後に課題を残した。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は，東京学芸大学に附属する全日制の高等学校であり，心身の発達に応じた後期中等普通教育を行うとともに，大学の計画に基づき，他の附属学校との連携を図りつつ，教員養成のための教育実習の実施にあたることを特色としている。

学級規模は，１学年８クラスで，一般中学校出身者（約100名），三校ある附属中学校の出身者（約220名）や帰国生（約20名）をあわせて，各学年とも男女ほぼ同数の1000名あまりの生徒が在籍している。生徒の通学区域は東京都，神奈川県を中心として広範囲に及び，学区がないことから親元を離れて学生寮などから通学してくる生徒もいる。また，昭和50年度より，タイ国からの留学生を毎年約５名ずつ受け入れており，さまざまな教育環境を経験した生徒が集まっている。

卒業後はほぼすべての生徒が４年制大学に進学する。進学先の分野は多様だが，例年理系がやや多い。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

課程	学科	１年		２年		３年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	8	347	8	358	8	362	24	1067
計		8	347	8	358	8	362	24	1067

教員数55名（４名）

※今回の研究の対象となる実習・授業を実践した地理Ａ・日本史Ａは，いずれも１年生２単位の必修科目である。この他，地理歴史科については世界史Ａ（２

年生２単位必履修），世界史Ｂ・日本史Ｂ・地理Ｂ（３年生３単位選択履修）の授業が開設されている。なお，地理歴史科の授業は原則として各科目をそれぞれ専門とする２名の教員が分担している。

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

（1）研究主題

フィールドワークを通じた２科目連携学習による，「地域への主体的思考」を育成するための指導の改善

（2）研究主題設定の理由

新しい高等学校学習指導要領において，地理Ａでは読図や地域調査を通じた地理的技能の習得と，諸課題を地理的に考察する力の育成，日本史Ａでは現代社会の諸課題に対する歴史的考察，歴史を学ぶ意義に気付かせる学習，そして両科目ともに地図を含めた諸資料の活用の重要性が示されている。そこで，フィールドワークを通じた地理Ａ・日本史Ａの連携により，身近な地域について自ら主題や課題を発見し，様々な資料に基づいて地理的・歴史的に考察する力（「地域への主体的思考」）を育てる指導方法を研究することにした。

（3）取組体制

地理実習については地理担当教員２名が実習帳の作成に当たり，事前，事後の指導を行った。ただし，実習当日は地理歴史科・公民科全教員と１学年担任団で指導に当たった。地理Ａ・日本史Ａの２科目連携授業やそれぞれの科目の授業については，地理担当教員２名，日本史担当教員２名の計４名が計画・実施に当たった。

（4）２年間の主な取組

２年間にわたって次の表のような取組を行った。

表１　２年間の主な取組

平成21年度	5月　地理実習事前指導 【地理Ａ】 地図技能（地図の種類・図法の確認，読図）習得，地形段彩図作成 【日本史Ａ】 「江戸から東京への政治過程と都市の変化について」 6月　地理実習（フィールドワーク）と事後指導 【地理Ａ】 「東京の地形・自然環境」 「都市と村落の発達経緯」 【日本史Ａ】「近代都市への変貌」 11月　公開教育研究大会における授業公開 「地理と歴史の協業を通じて―地域をみる目―」 【地理Ａ・日本史Ａ２科目連携授業】 「東京にみる景観の変遷と現代―地理実習を踏まえて」 【地理Ａ】「東京の自然環境と都市構造」 【日本史Ａ】 「近代東京の町づくりと景観」 2月　研究指定校事業中間報告会で発表
平成22年度	5月　地理実習事前指導 6月　地理実習（フィールドワーク）と事後指導 ＊これについては平成21年度と同様だが，新たに日本史Ａからも課題を与えた。 11月　情報教育公開研究会における授業公開 【地理Ａ・日本史Ａ２科目連携授業】 「関東大震災の被害と復興」 ＊プロジェクタ・スクリーンの活用を図った。 1月　教育課程研究指定校事業研究協議会で発表 3月　『東京学芸大学附属高等学校紀要』に研究成果をまとめた論文を寄稿

２　研究内容及び具体的な研究活動

（1）研究の重点

本校では以前から地理の授業の一環として地理実習（東京を題材としたフィールドワーク）を実施してきた。本研究ではその蓄積を生かし，新しい高等学校学習指導要領で重視されている地域調査とその事前，事後の指導の在り方について実例を示すとともに，さらなる改善を図った。さらに，地理実習での体験や観察事項を踏まえた地理Ａ・日本史Ａ２科目連携授業やそれぞれの科目での授業を行い，身近な地域について自ら主題や課題を発見し，さまざまな資料に基づいて地理的・歴史的に考察する力（「地域への主体的思考」）を育成することを目指した。

（2）具体的な取組

①地理実習と事前，事後指導

本校で地理Ａの授業の一環として長年にわたって実施してきた地理実習（東京を題材としたフィールドワーク）を平成21・22年度も実施した。１年生全員がグループに分かれ，江戸城の外堀と皇居周辺を結んだコースを歩き，地形的な特色と都市構造の関連，歴史的背景と景観の関係，都市の現代的な諸問題などについての観察を行い，実習帳にまとめた。

表２　地理実習の当日の課題と作業内容

実習当日の課題	作業の内容と注意点
(1)観察記録の作成	歩行中に観察した事物の記録。その際，次のことに注意すること。 ・都市の機能分化 ・都史と交通 ・土地利用の変容 ・地形的特質 ・国際化の進展
(2)スケッチ	次の地点から１地点を選び，景観のスケッチをすること。地形や建造物の特色が明瞭に分かるようにすること。 ・国会前庭から桜田門方面 ・喰違見付付近から赤坂方面 ・聖橋から秋葉原方面
	・桜田門から国会方面
(3)通過地点の断面図の作成	次の各地点間から１地点間を選び，断面図を描く。台地と低地，堀と河川，江戸城の関係を考える。 ・猿楽町から神田駿河台（女坂） ・聖橋から万世橋（淡路坂） ・外堀通りから日枝神社 ・弁慶橋から喰違見付（紀尾井坂）
(4)土地利用等の調査	実習帳に示された地区（下のいずれか）の土地の利用・景観・機能について調べる。 ・赤坂見付か神田紺屋町付近 ・神田駿河台か日本橋室町地区

実習当日の課題と作業内容は上の表の通りである。コース途中の小石川橋と水準原点には地理歴史科・公民科の教員が交替で待機して解説を行うが，それ以外の作業は基本的に各グループが自主的に進めた。

図１　地理実習（小石川橋での指導風景）

地理Ａでは地理実習の事前指導として地形図の読図に必要な基本事項の学習と東京の地形段彩図の作成を行い，事後指導として東京の自然環境や都市景観に関する授業を行った。また，日本史Ａでは事前に江戸から東京への政治過程についての授業を行い，事後にも折に触れて東京の近代都市への変貌について扱った。

②地理Ａ・日本史Ａの２科目連携授業

地理実習の成果を教室で行う授業に還元する試みとして，地理実習の体験やそこでの観察事項を基に，地理Ａと日本史Ａの担当者がチーム・ティーチングの形で，東京をめぐる諸問題を地理的・歴史的に多様な視点から考察する授業を行った。

平成21年度公開教育研究大会「新教育課程における課題と展望」で，地理歴史科は「地理と歴史の協業を通じて」のテーマで三つの授業を公開した。そのうち，「東京をめぐる景観の変遷と現代」を地理Ａ・日本史Ａのチーム・ティーチングの形で行い（図２），地理実習のコース上で観察できる事項を手がかりとして，大規模開発によって形成された近世都市江戸の歴史的変遷と近代及び現代の東京の都市機能や景観について考察した（図３）。

図２　授業風景

また，平成22年度情報教育公開研究会では同様の形態による「関東大震災の被害と復興」の授業を公開した。ここでは東京都慰霊堂や小学校・公園など，

東京にみる景観の変遷と現代－地理実習をふまえて－

東京学芸大学附属高校
地理歴史科　藤野　敦
栗山　絵理

本校生徒の「生活圏」であり、日本の首都機能を担う「東京」に着目し、１学期に行った「地理実習（地域調査）」の成果を基に、「水（河川・水路）」「土地利用」「再開発」という観点から歴史と地理の協業を目指した授業を実践する。

新しい高等学校学習指導要領によれば、「地理Ａ」では諸図や地域調査を通じて、地理的技能を習得し、諸課題を地理的に考察する力の育成が求められている。一方、「日本史Ａ」においては、現代社会および現代的諸課題の歴史的形成過程への観点からの考察を促す活動を通して、歴史への関心・学ぶ意義に気づかせる学習が示されている。また、地図を含めた諸資料のいっそうの活用を促している。

本校の「地理実習」をふまえ、本授業は、東京の様々な年代の地図を活用し、水路の開削・農地開発・埋め立てなどの大規模開発によって形成された近世都市江戸および周辺農村から成立した歴史的変遷が、流通や交通、商業地や工業用地の形成、地形や自然など、近代の東京及び現代の東京の様々な都市機能・景観に大きな影響を与えている。これらをふまえ、現代の東京が抱える諸問題への対処を考察・展望する視点を歴史的な時間軸・地理的な空間軸から学習の過程として位置づけていきたい。

＜１時間目＞

	項目	提示事項	資料および活動
導入	東京景観　地理実習写真Ⅰ	6月実施の地理実習時の景観等の想起	写真スライド利用
展開Ⅰ	東京の地理的特色・構造 ・武蔵野台地 ・台地と海岸線 ・上水の必要性 地形の変遷 ・近世初期の江戸開発 ・水（流通・飲料水） ・江戸の井戸	・（事例）埋め立て （日比谷入り江の埋め立て） 土砂800万立方メートル 11tダンプ　133万台分 並べると1万キロ	・（作業）現代の地図上の１０ｍ等高線をなぞる。 ・上水経路 ・埋設水道管配置図
展開Ⅱ	江戸が明治の首都となった経緯 ・政治状況　江戸城の開城 ・地形的な利点 ・首都機能の継承 （大名屋敷が公共施設へ）	前島密建議書 ・江戸湾は巨船時代に対応 ・都市発展の地理的可能性 ・市街地の広さと将来的余地 ・公共施設建設の経費節減 など提示	前島密建議書
展開Ⅲ	明治の都市計画の変遷	・大名屋敷と官庁設置 ・銀座の煉瓦街 ・多種多様な都市計画とその挫折 （丸の内、兜町など）	VTR（5分使用）
まとめ	・前島建議書の見通しと現代の東京		前島の建言を、実際の東京のその後の発達と比較する。

＜２時間目＞

	項目	提示事項	資料および活動
導入	東京景観　地理実習写真Ⅱ ・　江戸との接点と小石川橋	・「汐見坂」地名由来 ・天守跡 ・小石川橋	写真
展開Ⅰ	神田川の題材 （問）地形と流路の矛盾 神田川周辺の流通の変遷 江戸初期から明治、現代への変遷 ・物資流通網の変化 運河・船から鉄道、道路へ （現代）ゴミ処理船の利用 船はどこに向かうのか。	・台地を横切る川 人工的な開削の確認 ・近世の流通網としての利用 江戸湾→隅田川→神田川 ・近代の日本橋川の開削と飯田町駅・甲武鉄道 かつての流通ルートを、現代は廃棄物処理のルートとして利用されていることを確認する。	地図の等高線との確認。断面図のイメージ。 ・飯田町駅の確認 写真利用
展開Ⅱ	現代東京の景観と歴史的結節点 ・高度成長期の変貌 （問）首都高速建設はなぜ短期間で実現したのか。	首都高速を現代の地図上に示す（指示） ・現代の首都高速地図と江戸の地図を対照させる。	（作業） ・地図で首都高速確認。 ・川・運河の上を利用していることを確認。 ・写真
展開Ⅲ	近年の大規模開発 インナーシティー開発と大規模区画 大名屋敷の区画との共通性と土地利用 歴史的経緯の確認 大名屋敷→公共施設→近年の諸状況の変化→再開発	・現代地図上の大規模空間を確認（六本木ヒルズ・ミッドタウン東京・汐留シオサイト・リーバーシティー21など）。 ・江戸時代の地図で大名屋敷の区画に照合されることに気づかせる。 ・大規模な用地として継承 ・諸条件（流通網など）の変化などから役割を終えて再開発の対象となることを示す。	・地図上の大規模空白地を色で塗り分ける。 ・江戸時代の地図と対照する。
まとめ	①「汐留シオサイト」が現在の地域に開発された経緯を説明しなさい。また、なぜ近年、その地域が開発地として選ばれたのか、背景を考察しましょう。 ②現代の土地利用が歴史的な経緯でさまざまな制約を受けている事実を考慮して、現代に生きる私たちがどのような視点をもって開発を進める必要があるのか考察してみましょう。		・用紙に記載。 →地図中「旧国鉄貨物駅」との記載から流通の変化とのかかわりを意識させる。 →歴史的な視点から、次代を見据えた現代への対処の視点育成を促す。

図３　平成 21 年度地理Ａ・日本史Ａ２科目連携授業「東京をめぐる景観の変遷と現代」指導案

現在の東京に残されている施設や景観を手がかりに，地理実習の観察事項も振り返りつつ，関東大震災の被害状況や復興計画の特徴について考察した（図４）。

③科目間連携を意識した地理Ａ・日本史Ａの授業

地理Ａ・日本史Ａそれぞれの授業で地理実習の成果をさらに生かすことも試みた。そのうち，地理Ａの「東京の自然環境と都市構造」と日本史Ａの「近代東京の町づくりと景観」の授業を平成21年度公開教育研究大会で公開した。前者は地理実習で観察した地域の地形や都市構造の特徴を歴史的背景を踏まえて改めて考察するもの，後者は地理実習のコースに入っている駿河台女坂の景観とその変化を手がかりに，関東大震災の復興計画と大正期の政治社会状況について考察するものとした。

３　研究の成果と課題

地理実習を中心とする２年間の実践を通じて，次のような点が成果として確認できた。

1)　身近な地域について生徒の関心を喚起し，地理的な技能を習得しつつ，都市構造やその成立過程について学習させる機会として，野外実習と綿密な事前，事後指導を伴う本校の地理実習は非常に有意義である。

2)　地理Ａ・日本史Ａの科目連携授業は，現在の東京が抱える諸問題を考察するためには，地理的条件や歴史的背景を考慮した多面的・多角的な考察が必要なことを学習する機会として有効である。特に，同じ問題について地理担当と日本史担当の教員が異なる視点から論じる様子を生徒に見せることによって，科目の縦割りになりがちな生徒の学習のイメージを揺さぶることができる。

地理A･日本史A連携授業学習指導案

日時：2010年11月22日（月）　対象クラス（場所）：１年G組（１年G組教室）　授業者：松本亜巨　安井　崇

単元：関東大震災の被害と復興（地理Ａ・日本史Ａ連携特設単元）

本時の目標　1)関東大震災と復興に関する基本的な事実関係について理解する。
2)関東大震災の被害状況と復興について資料に基づいて地理的視点から分析する。
3)災害や町並みについて歴史・地理など多様な視点から考察する態度を養う。

主な教材　地理Ａ：『高等学校　新地理Ａ　改訂版』（帝国書院，2007年検定済）
『詳解現代地図』（二宮書店，2008年検定済）
『新編地理資料2010』（とうほう，2010年）
『地理統計概覧2010年版　vol.50』（二宮書店，2010年）
日本史Ａ：『日本史Ａ　現代からの歴史』（東京書籍，2007年検定済）
『改訂版　詳録新日本史史料集成』（第一学習社，2008年）
『新詳日本史』（浜島書店，2006年）

配布資料　プリント１　関東地震と兵庫県南部地震の震源断層と震度７激震域の比較
関東地震当日12時の天気図（E），東京市での火災の広がり方
関東地震要因別死者（E）
プリント２　関東地震による旧東京市十五区の震度分布図
プリント３　1460年の東京，日本橋台地の位置と沖積基底の深さ，東京の地形・地質
プリント４　帝都復興事業の区画整理施行地区，日本橋浜町の区画整理の実施の前後
浜町公園，京橋川の改修
プリント５　１万分の１地図「日本橋」（部分）
プリント６　帝都復興事業により新設・拡幅された街路，復興小学校構想図
震災の火の手と焼け止まり
＊プリント１の（E）以外とプリント２・３はDから，プリント４・６はCから引用。

投影画像　画像１　横網町公園（東京都慰霊堂）現況
画像２　関東地震当日12時の天気図（E）
画像３　関東地震による旧東京市十五区の震度分布図（プリント２と同一）
画像４　東京市での火災の広がり方（プリント１収録のものと同内容）
画像５　被服廠跡の火災旋風（A）
画像６　1460年の東京（プリント３と同内容）（E）
画像７　１万分の１地図「日本橋」（部分）（プリント５と同一）
画像８　復興小学校・小公園構想図（F）
画像９　復興小学校・小公園現況
画像10　京橋小学校すべり台現況
＊アルファベットは資料の出典を示す。出典を明記していないものは安井撮影。

＜主要参考文献・Webサイト＞
A　小川益王監修『東京消失 関東大震災の秘録 防災日本列島』（文藝春秋企画出版部，2006年）
B　小沢徳志編『写真で見る関東大震災』（ちくま文庫，2003年）
C　越澤明『東京の都市計画』（岩波新書，1991年）
D　武村雅之『関東大震災　大東京圏の揺れを知る』（鹿島出版会，2003年）
E　『関東大震災80年　THE地震展[震立科学博物館]』（読売新聞東京本社，2003年）
F　http://www.geocities.jp/zouenkasyudan/52parks/index.htm（震災復興52小公園）

時間	項目	指導内容	指導の手順と留意事項（＊）プロジェクタ(◎)・生徒作業(☆)
導入5分	出欠確認(M)		＊地理実習の際のプリント・資料を持参させる（事前指示済み）
	震災の被害を伝えるもの(Y)	東京都慰霊堂の現況	◎横網町公園画像投影 この場所はどこか？ これはどのような場所か？
展開1 20分	関東大震災の概要(Y)（8分）	関東大震災の歴史的意義 ・「大正」と「昭和」の転換点 関東大震災の揺れと被害 ・発生日時・気象状況 ・被害状況　揺れの被害 火災による被害	＊プリント１配布 ◎当日12時天気図投影 ◎震度分布図投影 ◎火災拡大図投影
	東京の被害状況(M)（12分）	・流言飛語による被害 東京の揺れと火災の状況の分析 ・以下の点を確認する 元入江・低湿地は震度が大きい 火災が広がったのは下町の低地	◎火災系統図（黒板に貼る） ◎被服廠跡の火災旋風図投影 ＊本時は立ち入らない ☆プリント２・３配布 a, b.の比較検討を行わせる。 a. 震度分布地図と地盤地図 b. 火災系統地図と色塗り地形図 （作業時間5分程度） 気づいたことをメモ・発表 ◎1460年の東京と震度分布図投影
展開2 20分	震災復興計画の展開(Y)（6分）	震災復興計画 後藤新平内相の震災復興計画 実施された事業の概要 区画整理，道路・橋の整備 震災復興公園と小学校	＊計画縮小の過程については最小限言及するのみ ＊プリント４配布
	震災を防ぐための知恵―公園と小学校(M)（12分）	復興公園と小学校の立地と構造 ・以下の点を確認する 小学校と公園が隣接して立地 災害時には校舎が防火壁に，公園が避難場所になる デザイン面での特徴	☆プリント５を配布して作業 中央区周辺の現在の地図を見て，公園の場所を緑で塗り，公園の周囲にどのような施設があるか確認 （作業時間５分程度） ◎中央区周辺地図投影 ◎復興小学校・公園平面図と現況画像投影
	震災復興事業の意義(Y)（2分）	震災復興事業の意義 都心部・下町に街路・公園整備	＊プリント６配布
まとめ5分	景観と建物が語る歴史(Y)	本校の校舎：復興小学校との共通点 忘れてはならない震災の歴史 ・建物や施設を保存する意味	◎京橋公園滑台画像投影
	授業のまとめ(M)		

図４　平成 22 年度地理Ａ・日本史Ａ２科目連携授業「東京をめぐる景観の変遷と現代」指導案

3) 地理歴史科における科目間連携を進める上で,フィールドワークはその核として教育的価値が高い。本校ではすっかり定着している地理実習だが,今回の研究を通じて,地理はもとより日本史の学習における意義を改めて認識することができた。全生徒が東京の町を実際に歩いて観察した経験をもっているということは,今回の研究で公開した授業以外の単元でも活用できるはずである。

しかし,「地域への主体的思考」の育成という観点から見ると,次のように今後に残された課題も少なくない。

1) 地理実習もこれに関連する授業においても,考えるべきテーマは教員から提示されており,「自ら主題や課題を発見」する力を育てるという点については十分な取組ができなかった。
2) 地理実習やこれと関連する授業に対する生徒の反応を客観的に把握する努力が不十分だった。1)の解決のためにも,地理実習については,これによって生徒の東京に対する認識やイメージがどのように変わったかを評価する機会を事前,事後指導の過程に組み込み,その結果をフィードバックしていくことが必要である。
3) 科目間の連携授業については,授業内容の精選と進行の工夫がさらに必要である。また,現在の学校の在り方を前提にすると,担当者の時間割調整をはじめとする技術的な課題克服も検討課題である。
4) 取り扱う内容の制約から世界史Aや世界史Bとの科目間連携については,具体的な取組ができなかった。

とはいえ,地理歴史科の指導,特に科目間の連携の核として地理実習の教育的意義が極めて大きいことは間違いなく,今後も地理実習とこれを中心とした授業の改善に地道に取り組んでいきたい。